

韓国人日本語学習者の授業観の分析：授業に対する認知的変容についての事例的研究

著者	安 龍洙, 渡辺 文夫, 才田 いずみ
雑誌名	東北大学文学部日本語学科論集
巻	5
ページ	1-12
発行年	1995-09-30
URL	http://hdl.handle.net/10097/33517

韓国人日本語学習者の授業観の分析 —授業に対する認知的変容についての事例的研究—

安 龍洙 渡辺 文夫 才田 いずみ

キーワード 授業観の変容 授業分析 クラスター分析 準抛枠 学習者の視点

要 旨 東北大学での5週間の集中日本語研修に参加した韓国人大学生20名のうち、成績上位群・下位群からそれぞれ2名を選び、研修の前後2回、「いい授業」についてPAC分析法による調査を行った。上位者では学習への自律的な意識が、下位者では教師への依存的な意識が特徴的であった。研修前後の比較では、上位者には授業観の変化が見られたが、下位者には明確な変化が見られなかった。

1. はじめに

従来の日本語教育の授業分析においては、教師の視点あるいは研究者の視点から授業・学習過程をとらえることが多かった。しかし、授業への参加者は学習者と教師の双方であり、学ぶ主体は学習者であることを踏まえるならば、学習者が認識する教授・学習過程をも分析の対象としなければならない(林1992)と考える。

東北大学文学部日本語教育学研究室では、1994年7月から8月にかけて、韓国全北大学校日語・日文学科の学生20名に対する5週間の日本語教育の集中研修を実施した。この研修は、媒介言語を一切使わずに、できるだけ生きた日本語に触れさせるため、ロールプレイ、体験学習、討論などの活動を中心に行われた。今回報告するのは、内藤(1993)が開発した個人別態度構造分析法(personal attitude construct : PAC, 以下PAC分析法とする)を用いて実施したこの研修の学習者、教師の認知的変容の調査のうち、学習者の授業観に関する研究結果の一部である。

PAC分析法とは、1) 当該テーマに関する自由連想、2) 連想項目間の類似度距離行列によるクラスター分析、3) 被験者によるクラスター構造の解釈、を通じて個人別に態度構造を分析する方法である。

2. 目的

本研究では、日本語が使われない環境で日本語授業を受けた韓国人日本語学習者が持っている「いい授業」に対する認知的枠組み、すなわち準拠枠を探り、彼らの授業観を記述し、日本語研修期間におけるその変容を明らかにすることを目的とする。

3. 方法

対象者：上述の研修を受講した韓国全北大学日語・日文学科2年生の中から選ばれた日本語学習の成績上位者 A・B の2名と下位者 C・D の2名、計4名である。なお、対象者の成績の判定は、全北大学における日本語学習に対する担当教官の判定と、研修の前に行ったプレースメントテストの結果に基づいた。

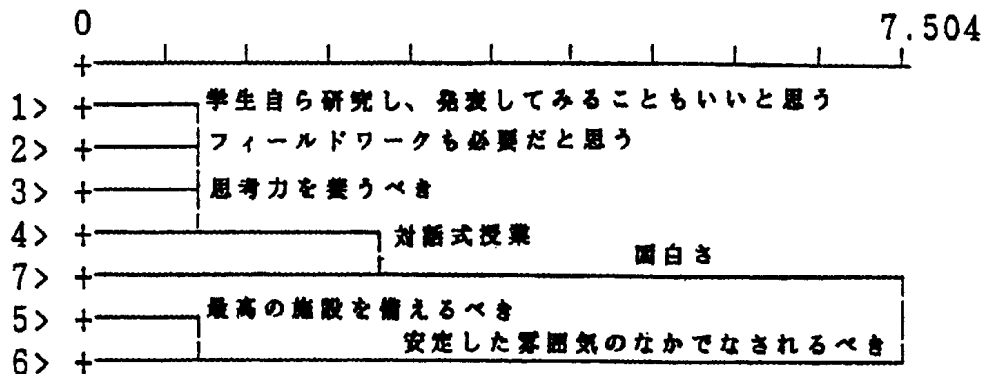
手続き：まず、内藤による PAC 分析法の手続きの文章をバックトランスレーションによって韓国語訳した。調査の実施は韓国語で第一著者によって行われた。まず、対象者に「いい授業」についてのイメージを思いつくままに一つ一つカードに記入させた。その後、そのカードを重要と思われる順序に並べさせた。さらにそれぞれのカードの組み合わせが、直感的イメージでその意味内容においてどの程度近いのかを7段階尺度で評定させた。この尺度での回答を基に、各イメージ間の類似度距離行列を得、それを用いてワード法でクラスター分析した。クラスター分析の結果に対する対象者自身の解釈を面接法によって求めた。この手続きによる調査を、研修開始1週目と終了直後に実施した。

4. 結果と考察

ここでは、まずクラスター分析の結果を示し、次にこの結果への対象者自身の解釈を記述し、最後に総合的解釈として、クラスター分析の結果と対象者の解釈に対する著者の解釈を述べる。対象者の解釈は、第一著者が訳した。

4.1 成績上位者

4.1.1 被験者Aの研修開始1週目の結果と解釈



クラスター1は、「学生自ら研究し、発表してみることもいいと思う」から「面白さ」までの5項目である。Aの解釈は、「従来の教師中心の一方的な教育は、学習効果も落ちる。学生同士が意見を交換する。学生が責任をもって積極的に授業に臨めば面白くなると思う。学生同士がお互いの意見交換をすれば、効果的で面白くなる」であった。

クラスター2は、「最高の施設を備えるべき」「安定した雰囲気でなされるべき」の2項目。Aの解釈は、「集中力、思考力」であった。

全体を統轄するイメージは、Aによれば「関心、好奇心、能率、実力向上、知的欲求」であった。

<総合的解釈>

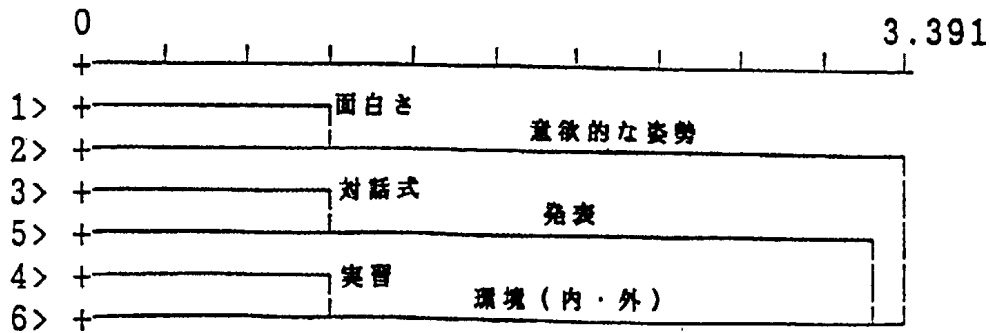
ここでは、まず、各クラスターの内容と対象者の解釈について検討した後で、筆者の解釈を加え、総合的に解釈する。

クラスター1は、Aが従来の教師中心の授業ではなく、学生中心で、学習者同士の相互作用を大切にしたいより実践的な授業を重視し、授業の改善を求めていることを示唆しているようである。

クラスター2より、Aはいい環境と安定した雰囲気で集中して学べる授業を大切に考えているように思われる。

全体としてAは、集中できる授業環境で行われる学習者中心で実践的な授業を「いい授業」と考えているようである。

4.1.2 被験者 A の研修終了直後の結果と解釈



クラスター1は、「面白さ」と「意欲的な姿勢」の2項目。このクラスターのA自身の解釈は、「教える側の教師は教え方について研究し、学生は意欲的な姿勢で授業に臨めば、授業が退屈でないからその科目が面白くなるし、自然に授業に興味を持てる」であった。

クラスター2は、「対話式」と「発表」の2項目。Aの解釈は、「自分の意見を発表して、それに対する先生や学生の意見を聞いて、新しい知識を得たい」であった。

クラスター3は、「実践」と「環境(内・外)」の2項目。Aの解釈は、「フィールド・ワークのような活動も重要だと思う」であった。

全体に対してのAのイメージは、「以上のような授業が行われるためには、教師と学生に高いレベルが要求される。授業は能率的・効果的になるが、実際問題として難しい。学生側の誠実な姿勢が要求される」であった。

<総合的解釈>

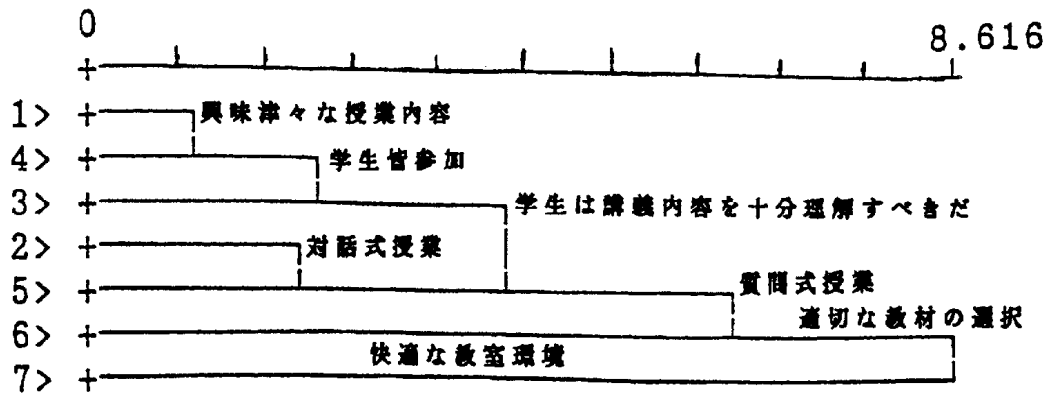
クラスター1は、Aが教師に学習者の学習意欲を高める教え方を求めていることを示唆している。

クラスター2より、Aが教師や他の学生との相互作用を通し、勉学することを重視していることが窺える。

クラスター3は、単なる講義形式の授業ではなく、実践が伴う学習スタイルをAが重視していることを示している。

全体としてみると、Aは従来の一方的な講義形式の授業ではなく、教師と学習者が一体となった実践を重視した学習スタイルが尊重される授業を望んでいるように思われる。

4.1.3 被験者Bの研修開始1週目の結果と解釈



クラスター1は、「興味津々な授業内容」から「質問式授業」までの5項目。Bの解釈は、「学生皆が先生に集中している」であった。

クラスター2は、「適切な教材の選択」の1項目。Bの解釈は、「教科書は文字だけではなく、挿絵などの視覚的効果のある内容も盛り込むべきだ。内容も重要だが、学習者に興味を持たせる素材も盛り込む必要がある」であった。

クラスター3は、「快適な教室環境」の1項目。Bの解釈は、「あまり暑くても寒くても勉強ができない。秋は読書の候と言われているように、快適な環境になるように整備してほしい」であった。

全体に対してのイメージは、「目だけではなく、身体全体が教師に集中している場面」であった。

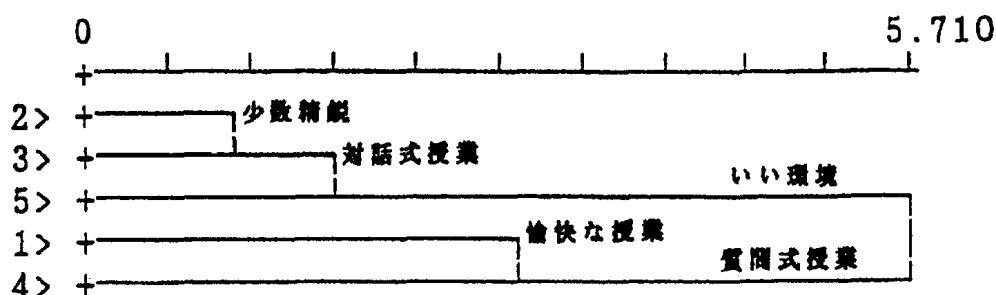
<総合的解釈>

クラスター1より、学習者は教師の考えをひたすら学ぶべきであると考えているBの姿勢が窺える。

クラスター2は、学習者が学びやすい教材を教師が準備すべきである、というBの考え方を反映しているように思われる。

クラスター3は、環境依存的なBの学習スタイルを表しているようである。全体として、Bは教師や教育環境に依存した姿勢を持っているようである。

4.1.4 被験者 B の研修終了直後の結果と解釈



クラスター1は、「少数精鋭」と「対話式授業」と「いい環境」の3項目。Bの解釈は、「対話式・質問式授業がなされるためには、少数精鋭のクラス編成が望ましい。1クラスに学生が多いとお互いに質問したり、意見交換することができない」であった。

クラスター2は、「愉快的な授業」「質問式授業」の2項目。Bの解釈は、「暑いときは楽しい授業ができなかった。室内温度、防音設備などの環境の問題が楽しい授業につながる1つの条件になる。2階でやった授業は楽しかったが、1階でやった授業は内容や先生の教え方に関係なく、あまり勉強ができなかった」であった。

全体に対してのBのイメージは、「集中」であった。

< 総合的解釈 >

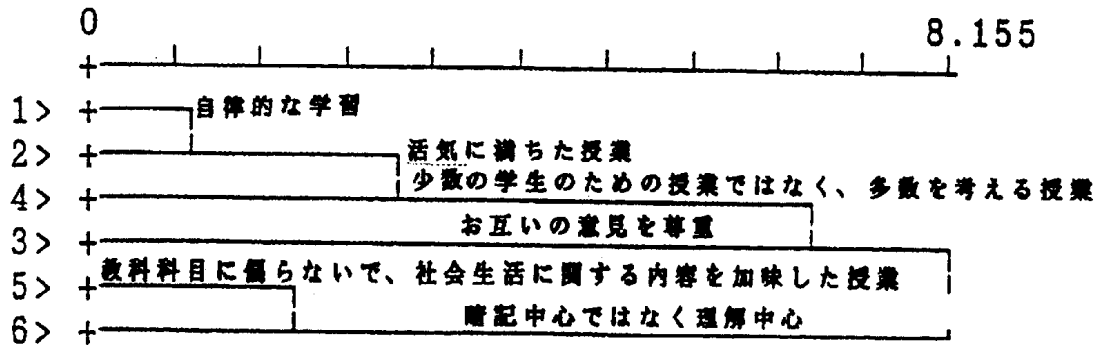
クラスター1は、韓国では見られない今回の研修で行われたような小人数で相互作用が持てる授業を「いい授業」とBがイメージしていることを示していると考えられる。

クラスター2には、楽しい授業が行われるよう環境や教育の方法が十分に整っていることが学業のための必要条件である、というBの考え方が反映されているようである。ここでは今回の研修での、教室環境を念頭に答えている。今回の研修では教室を2ヶ所設けて授業を行ったが、1ヶ所は授業観察室を使用し、もう1ヶ所は文学部の演習室を使用した。授業観察室は、冷房と防音装置がある程度整っているが、演習室は冷房装置もなく、近くの工事現場からの騒音など悪い条件下で授業が行われた。

全体としては、集中して勉強するためには、韓国では得にくかった学習環境が重要である、とBが認識していることが窺える。

4.2 成績下位者

4.2.1 被験者Cの研修開始1週目の結果と解釈



クラスター1は、「自律的な学習」から「お互いの意見を尊重」までの4項目。Cの解釈は、「教師は特定の少数の学生に合わせないで、学生皆の能力を考慮して授業を進めてほしい。皆が共感を持てるような授業内容が盛り込まれている」であった。

クラスター2は、「教科科目の内容に偏らないで、社会生活に関する内容を加味した授業」と「暗記中心ではなく理解中心」の2項目。Cの解釈は、「高校のとき、入試のために暗記中心の勉強ばかりさせられた。大学に入ってからあまり変わらない。特に教養科目は高校と同じだ。外国語は一人でもできると思う。学生皆が理解できるような社会生活などの内容が盛り込まれた授業」であった。

全体に対してCのイメージは、「我が国では受験勉強を中心に授業を進めている。高校は大学入試のための授業を行っている。大学も就職試験や各種の資格試験の準備のために暗記中心の勉強ばかりさせられた。学生皆が興味を持って参加できるような授業を行ってほしい。もっと専門的に研究したい学生は大学院に進めばいいと思う」であった。

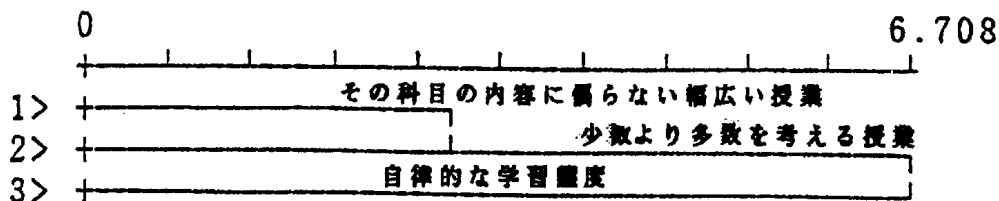
<総合的解釈>

クラスター1から、Cが授業そのものに対してよりは、教師－学生間の人間関係に重きを置いていること、また、成績がいい学生に合わせた授業に疎外感を感じている様子が窺える。

クラスター2からは、専門的な知識に関してではなく、韓国人の間に一般的に見られるように、教師を人生の先輩として見、社会的な事柄に関しての指導を教師に期待しているCの姿勢を読み取ることができる。

全体としては、Cは高校と大学の教育のあり方に対して批判的で、少数の成績がいい学生だけではなく、すべての学生が学びやすい授業環境を期待しているようである。

4.2.2 被験者Cの研修終了直後の結果と解釈



クラスター1は、「その科目の内容に偏らない幅広い授業」「少数より多数を考える授業」の2項目。Cの解釈は、「授業の内容に深く入るよりは、将来の社会生活に役に立つような内容を教えてもらいたい。授業に興味を持たない学生は、講義内容が良くても真面目に授業に参加しない。大多数の学生が共感するような内容を授業に取入れて欲しい」であった。

クラスター2は「自律的な学習態度」の1項目。Cの解釈は開始直後とは少し違うが、「体調が悪いときは授業が面白くない。体調が悪いのに講義を聞いているふりをしなければならないのは辛い。実際、それを強要される場合が多い」であった。

全体に対してのCのイメージは、「以上のことが授業に取入れられれば授業を拒否する学生はいないと思う」であった。

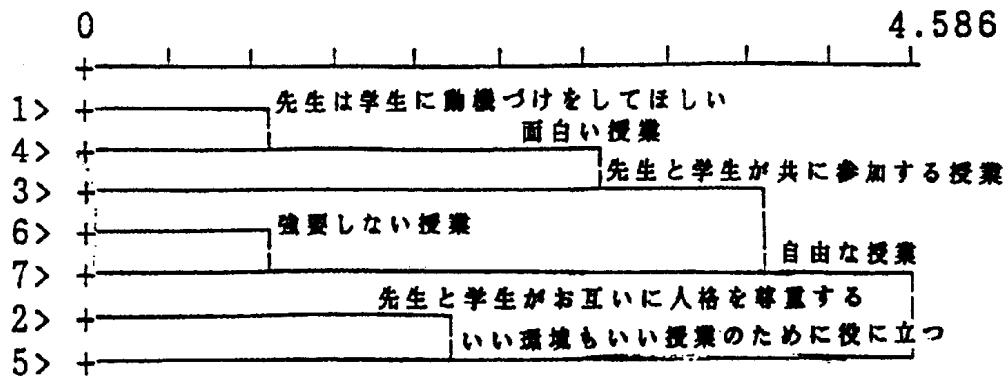
<総合的解釈>

クラスター1には、少数の成績上位群に合わせた授業に対するCの否定的な見方が表されている。

クラスター2は、体調が悪いときは、授業に対して手抜きをすることも自律的な学習態度である、と考えているC特有の管理されることへの批判的な認識を反映しているようである。

全体として、現状に合わせて努力しようとする姿勢が欠如しているため、自分が抱えている問題の責任を教育システムや教師側に転嫁し授業を否定的に見ているCの認識の仕方が窺える。

4.2.3 被験者Dの研修開始1週目の結果と解釈



クラスター1は、「先生は学生に動機づけをしてほしい」と「面白い授業」「先生と学生が共に参加する授業」の3項目。Dの解釈は、「授業が退屈でなく、面白い」である。

クラスター2は、「強要しない授業」と「自由な授業」の2項目。Dの解釈は、「自由な雰囲気の中で授業がなされるべき。強要しないことは自由を意味する」であった。

クラスター3は、「先生と学生がお互いの人格を尊重する」の1項目。Dの解釈は、「人間的な授業ができると思う」である。

クラスター4は、「いい環境もいい授業のために役に立つ」の1項目。Dの解釈は、「環境は授業全体の基本になる」である。

全体に対してのイメージは、「果たして、以上のような問題点が解決できるか疑問だ」ということであった。

<総合的解釈>

クラスター1は、学習動機が弱いため、教師に動機づけをしてくれることを期待している他者依存的なDの姿勢と解釈できる。

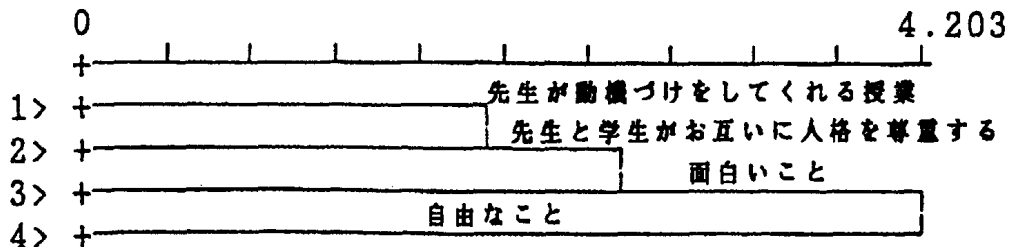
クラスター2から、教師が学習者にタスクを与えたり、発表をさせる授業の方法により、消極的な学生は自信を失ってしまうというDの考え方が読み取れる。

クラスター3から、授業において人間的な関係を求めているDの姿勢が分かる。

クラスター4も、クラスター1と似ていて、環境依存的なDの姿勢の現れと考えられる。

全体的に見ると、Dは他者や環境に依存的で、教師との人間的関係を求める姿勢が示されている。また、授業そのものに対しても懐疑的であることが分かる。

4.2.4 被験者 D の研修終了直後の結果と解釈



クラスター1は、「先生が動機づけをしてくれる授業」の1項目。Dの解釈は「やる気がないと勉強をしない。先生が動機づけをしてくれれば、やる気が出ると思う」である。

クラスター2は、「先生と学生がお互いの人格を尊重する」と「面白いこと」と「自由なこと」の3項目。Dの解釈は、「韓国の教育の現状からみて、現実的に難しい」である。

全体に対してのイメージは、「先生の役割が重要だ」ということであった。

<総合的解釈>

クラスター1より、Dの教師依存的で、学習意欲の弱い姿勢が窺える。同時に、教師に責任の転嫁をしているDの姿勢が表われている。

クラスター2は、教師や学生に対して人間的な待遇を期待しているが、実際問題として難しいと判断しているDの姿勢を示している。ここでも授業への積極性の弱さが窺える。

全体としてみると、Dの消極的で他者依存的な姿勢が明確に示されている。

5. 全体に関する総合的分析

5.1 成績上位・下位者の特徴

上位者2名は、学習者が自主的に授業運営に関することを重視している。2名ともに下位者とは異なり「いい授業」のイメージを一般的な学校の授業ではなく、日本語の授業を念頭に答えている。また、外国語学習に必要な視聴覚教材、防音設備などの教育環境に対する認識も具体的である。さらに、学習者自身の自律的な学習のための教師の支援を求めていることが、今回の調査で示された。

A・Bとも、開始直後は学習者側だけから授業をみる準拠枠を持っていたが、それが終了直後では、学習者と教師との相互作用としていい授業を認識しようとするものに変化した。

一方、下位者2名は、授業運営とは直接関係のないイメージを多く挙げている。また、教師や学生同士の対人関係を重視している様子が窺える。さらに、消極的な態度で授業に臨んでおり、授業に対する反応が比較的懐疑的で、教師側の授業運営のあり方への批判的姿勢が見られる。現在の日本語学習と将来の進路問題との隔たりを強く感じ、教師に動機づけしてくれることを期待していることも示された。イメージしている授業が日本語の授業だけでなく、高校や大学での一般的な授業であることも特徴的である。

5.2 授業観の認知的変容

今回の調査では上位者・下位者ともに、イメージされた項目数が、開始直後より終了直後のほうが減少している。授業環境に関しては、例えば、上位者のAの場合、開始直後では「最高の施設を備えるべき」と「安定した雰囲気の中かでなされるべき」の2項目が挙げられたが、終了直後では「環境(内・外)」の1項目に減少していた。また、授業活動に関しては、下位者のDの場合、開始直後は「強要しない授業」と「自由な授業」の2項目であったが、終了直後では「自由なこと」の1項目に減少した。このことから、上位者・下位者ともに終了直後の調査では授業に対する準拠枠が整理されていると考えられる。

また、上位者A・Bとも、開始直後では学習者側に関してのみの準拠枠を持っていることが示されたが、終了直後では学習者と教師と相互作用として「いい授業」を認識しようとする準拠枠が見られた。一方、下位者の場合、Cには、授業そのものに対する批判的な視点自体には明確な変化がみられなかった。しかし、その内容が、開始直後は一般的な授業に関してのものだったのが、終了直後は受講した研修での経験に基づいたものになっている。さらに、教師に対する依存も見られなくなった。Dの場合、教師への依存的な態度は開始直後もも終了直後にも現われており、大きな変化は見られなかった。

以上のことから、成績上位者においては、研修の前後で授業観の変化が見られたが、下位者においては、変化が見られなかったといえる。この上位者と下位者の違いは、4つの事例から得られた今回の調査の結果からだけでは一般化はできないが、次の実証研究のための教育心理学的に重要な仮説になると考え

られる。

6. おわりに

研究者があらかじめ用意した質問項目に対して対象者が強制的に反応させられる質問紙法とは違って、PAC分析法では、対象者が自由に自発的に自ら項目を作り出し、それに基づいて自らが反応する。このように、対象者の自発性・自律性が最大限尊重されることによって、比較的簡単な手続きで、意識の奥深くにある構造が明らかにされるのが、PAC分析法の特徴である。このような方法によって、日本語の授業における学習者や教師の授業に対する準拠枠、すなわち授業観が明らかにすることができる。従って、授業改善にPAC分析法が有用であることが、本研究によって示唆されたといえよう。

謝辞

PAC分析法を開発した信州大学人文学部内藤哲雄教授から多大なご助言をいただいた。感謝の意を表したい。

引用・参考文献

- (1) 内藤哲雄 (1993) 「学級風土の事例記述的クラスター分析」『実験社会心理学研究』33-2
- (2) 林さと子 (1992) 「授業分析における学習者の視点」『日本語教育』76号 pp.101 - 109 日本語教育学会
- (3) 藤田裕子・佐藤友則 (1995) 「日本語教育実習は教育観をどのように変えるか」『平成7年度日本語教育学会春季大会予稿集』pp.180-185
- (4) 渡辺文夫・安龍洙・内藤哲雄 (1995) 「韓国人日本語学習者と日本人教師の授業観の比較－個人別態度構造分析法 (PAC) による事例的研究－」『日本社会心理学会発表論文集』Vol.35, pp.360-363
- (5) 渡辺文夫・才田いずみ・安龍洙他 (1994) 「日本語教育と認知的変容の研究1－韓国人学習者と日本人実習生の授業観についての事例的研究－」『日本語教育方法研究会誌』Vol.1, No.3 pp.32-33 日本語教育方法研究会

－安：東北大学大学院生－

－渡辺：東北大学文学部助教授－

－才田：東北大学文学部助教授－